


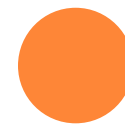
研究者としての自分を振り返って



早稲田大学 政治経済学術院教授
学術振興会 学術システム研究センター主任研究員
河野 勝

本日のメニュー

- 自己紹介
- 文部科学省と私の関わり
- 北米での経験から
- 人文学・社会科学の観点から



自己紹介



学歴／経歴

- 85 上智大学 法学部 国際関係法学科卒
- 87 イェール大学 国際関係論 修士
- 93 スタンフォード大学 政治学 博士
~~~~~
- 94-98 ブリティッシュコロンビア大学 助教授
- 96-97 フーバー研究所 ナショナルフェロー
- 98-03 青山学院大学 国際政治経済学部 助教授
- 03- 現職



## 主な役職／兼職など

- 早稲田大学 高等研究所 兼任研究員
- 早稲田大学 国際部 参与  
~~~~~
- 放送大学 客員教授 (07-11 ラジオ／11-現在 テレビ)
- 法務省 司法試験委員 (2010年度)
- 国立国会図書館 客員調査員 (2012年度)
- 学術振興会 学術システム研究センター主任研究員
(2013~15年度)
~~~~~
- BSフジ「プライムニュース」ブレインキャスター
- BSフジ「コンパス」オピニオンアナリスト



## 研究関心

- 現代日本政治（政党、投票行動、官僚制、政策決定、外交・安全保障政策など）
- 国際関係論（理論および実証）
- 憲法／立憲主義（アメリカ連邦憲法の制定過程、マディソンの思想など）
- 社会科学方法論           ほか



文部科学省と私との関わり

文部(科学)省は、  
私の人生を決めた！



文部科学省

「受験校」と呼ばれる中高6年一貫教育の学校で、国立大学への進学を目指して勉強・・・

怒

文部(科学)

「共通一次試験」の導入

人生を決め

制度化された「受験」ルールへの反発

人生で初めて知る「国家権力の介入」

高校時代でアメリカ留学を決意  
Carlsbad High School (California)

上智大学法学部  
国際関係法学科への推薦入学

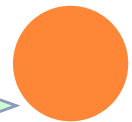




## 上智大学時代...

- 法学部の専門科目はつまらなかった(例外として佐藤功の「憲法」、そして当時アメリカから帰国したばかりの猪口邦子の「国際政治学」)
- もっとも面白かった授業は、一般教養科目であった村上陽一郎の「自然科学史」
- 国際関係研究所(武者小路公秀、蠟山道雄、鶴見和子、緒方貞子ほか)でも、授業・セミナーをとった
- 吉本隆明、柄谷行人、蓮實重彦、加藤典洋などの思想・文芸評論、フーコー、デリダ、浅田彰などのポストモダン哲学などに傾倒していた

基本的には、  
大学がつまらなかったのも、自分で本を読み、  
勉強する「ネクラ」な学生、と総括できる



## 上智大学時代...

- 法学部の専門科目はつまらなかった(例外として佐藤功の「**憲法**」、そして当時アメリカから帰国したばかりの猪口邦子の「**国際政治学**」)
- もっとも面白かった授業は、一般教養科目であった村上陽一郎の「**自然科学史**」
- 国際関係研究所(武者小路公秀、蠟山道雄、鶴見和子、緒方貞子ほか)でも、授業・セミナーをとった
- 吉本隆明、柄谷行人、蓮實重彦、加藤典洋などの**思想・文芸評論**、フーコー、デリダ、浅田彰などのポストモダン**哲学**などに傾倒していた



# 北米での経験から



# 北米での経験から(1) 大学院生の立場 ---北米に行って何に驚いたか---

- ・留学帰国組が増えた
- ・方法論(統計・ゲーム論など)教育の充実
- ・社会科学分野の日本研究の確立, etc

- 日本で学んだ政治学や国際関係論の知識は、まったく(本当にまったく)役にたたなかった

→このギャップは、いまではだいぶ緩和されたと思う

→他方、解消しきれないギャップが、社会科学においては残るのではないか、とも思う

- イェールよりもスタンフォードの方が、圧倒的に自分の肌にあう教育をしてくれた

→アメリカといえども、学風に違いがある

→スタンフォードに行っていなければ、研究者として成功したとは思えない

「物知り」ではなく「考える力」を養成する教育:「この論文の内容をワンセンテンスで掴め！」



## 北米での経験から(2) 研究者の立場

---日本に戻ってきて何に驚いたか---

- 給料(その他の報酬)を交渉できない
- TAシステムが機能していない
- 科研費の申請・執行・報告が面倒くさい
- COEやリーディング大学院など、文部科学省が「人参」をぶら下げて(つまりは「国家権力」を使って)、大学の研究活動に介入している

つまり、金銭的インセンティブメカニズムが機能していない、ということ。その帰結として、必ずしも健全でない補完メカニズムが働いている？

- 1) 政府審議会に名を連ねることが名誉？
- 2) メディアの露出を通して自己顕示欲を満足させる？
- 3) 企業から金を集めることに腐心するようになる？
- 4) 東大の権威が温存強化される？

etc

TAシステムは、教授の負担を減らし、院生に教育を実体験させ、しかも院生に金銭的補助を与えるという、一石三鳥のシステムである。出席カードを配るだけのTAは意味がない。多人数相手の講義と少人数のセッションを組み合わせた教育を推進する必要あり。

## 北米での経験から(2) 研究者の立場 ---日本に戻ってきて何に驚いたか---

- 給料(その他の報酬)を交渉できない
- TAシステムが機能していない
- 科研費の申請・執行・報告が面倒くさい
- COEやリーディング大学院など、文部科学省が「人参」をぶら下げて(つまりは「国家権力」を使って)、大学の研究活動に介入している

カナダでの経験:

- 1) 年度をまたぐ繰り越しや細目変更は、自由
- 2) 学部のアドミニストレータが財務管理
- 3) 成果報告義務なし
- 4) 簡素な種目

- 1) 研究活動を大学という単位で囲み込むことに意味があるのか?
- 2) 「申請書」や「報告書」の作成で、大学が疲れきっている
- 3) 学内で同じ人材への仕事の集中

# 人文学・社会科学の観点 から



人文学・社会科学の観点  
から





## 二つの方向性

- 世界標準の社会科学の促進:「本」を書くより「論文」を書け(英文のトップジャーナルへの掲載が究極目標)
  - 「最先端」だけを追い体系を知らないで「知識」といえるのか?(たとえば、スミスもケインズも読んだことのない経済学者が学部生に対して経済学の講義をできるのか?)
  - 「掲載」されることではなく、引用され影響を残すことが重要。トップジャーナルに掲載されても、5年もしないうちに忘れ去られる論文は無数にある。
- 日本独自の社会科学との共存:社会とのレレヴァンスがあるかぎり、日本語でかかれた本にも意味がある
  - 共存は難しい。結局、世界標準の社会科学を意識したとたん、それに駆逐されてしまうのではないか。



## 二つの方向性

- 世界  
書け

→「最  
のか？

部生に

→ジャ

れ影響

ルに掲

- 日本  
ある

→共存

とたん、それに駆逐されてしまうのではないか。



いま夏目漱  
石のような頭  
脳明晰な人  
が、はたして  
日本語で書  
くことを選択  
するか？

ナ  
は無数にある。

レヴァンスが  
がある

学を意識した



## 二つの方向性

- 世界標準の社会科学の促進: 「本」を書くより「論文」を書け (英文のトップジャーナルへの掲載が究極目標)

→ 「最先端」だけを追い続けるのではなく「知識」といえるのか? (スミスもケインズも読んだことのない経済学者が学部生

単に、学術的でなく、政治的、政策的、  
イデオロギー的対立軸と重なり合っている

→ 影響を残すことが重要なのではないか。トップジャーナルに掲載されても、すぐに忘れられる論文は無数にある。

- 日本独自の社会科学との対立軸: 社会とのレlevanceがあるかぎり、日本語でかかれた本にも意味がある

→ 共存は難しい。結局、世界標準の社会科学を意識したとたん、それに駆逐されてしまうのではないか。



## 二つの方向性

- 世界標準の社会科学の書け(英文のト

→「最先端」だ  
のか？(スミスも  
部生に対して経

→ジャーナルに

れ影響を残すことが重

ルに掲載されても、すぐに無数にある。

- 日本独自の社会科学との共存:社会とのレレヴァンスがあるかぎり、日本語でかかれた本にも意味がある

→共存は難しい。結局、世界標準の社会科学を意識したとたん、それに駆逐されてしまうのではないか。

### ある編集者の述懐

「昔は、夏休みに入ると、先生方は、新書のような一般向けの本を一冊書いてくれた。しかし、今は、**COE**や何だので忙しすぎ。それで、学術論文集ばかり、うちに依頼がくる。これでは、日本の出版業界は厳しい。」



ご清聴、ありがとうございました。

